

高等学校家庭科における手芸の学習（第2報）

— スウェーデン刺繍を取り上げた授業実践 —

わか つき あつ み
若 月 温 美

（学習院大学大学院院生・東葉高等学校教諭）

なか だ いく こ
仲 田 郁 子

（本 学 教 授）

1 研究の背景と目的

第1報（仲田、若月 2025）において筆者らは、我が国においてスウェーデン刺繍がどのように受け止められ広まってきたかについて検討するとともに、高等学校家庭科における手芸教育の歴史と現状を明らかにした。高等学校家庭科の衣生活領域における実習においては、長年にわたって被服製作が重視されており、手芸は専門的な内容である選択科目での実践に限られていた。

高等学校家庭基礎においては、前報でも述べた通り、2008年告示の学習指導要領以降、被服製作については言及がないにもかかわらず、多くの学校で基礎縫い実習が実施されている。布を用いた製作が高校生にとって必要な学習であると多くの教師が考えていることがうかがえるが、同学習指導要領に「生活を営むために必要な理解を図るとともに、それらに係る技能を身に付ける」と明記されているからか、まつり縫いやボタン付けなどの実用的な内容が重視されており、生活を豊かにするための手芸についてはほとんど取り上げられていないのが現状である。

近年の教育実践においては、学習者のウェルビーイングや主体的な学びの育成が重視されている。ウェルビーイングとは、経済的な豊かさのみならず、精神的な豊かさや健康までを含めて幸福や生きがいをつめる考え方である。家庭科は生活に直結する実践的教科であり、技能習得の過程で「できるようになった」「生活に役立つ」という自己効力感を高める役割を果たすことが期待されている（鈴木 2013）。

家庭科の授業では、調理をはじめとした実習を行うため、生徒は楽しんで取り組むが、その一方で、針や糸を使った実習に対しては「苦手」「難しい」といった否定的なイメージ

を抱く生徒も少なくない（田村、玉川 2004）。こうした否定的認識が、学習経験を通して「楽しい」「もっとやりたい」と変容するプロセスを解明することは、家庭科の教育的意義を明らかにする上で重要であるといえるだろう。

スウェーデン刺繍は、比較的容易な技法で短時間に作品を仕上げられると同時に、色彩や模様の選択に自由度があり、初心者でも個性を生かした表現が可能である。この特徴は、裁縫や手芸に苦手意識を持つ高校生にも達成感をもたらし、主体的に学ぶ姿勢を促すことと考えられる。

本研究は、高等学校家庭科におけるスウェーデン刺繍の授業実践を対象に、生徒の自由記述を質的に分析し、刺繍に取り組むことによる生徒のウェルビーイングに貢献することを検討することを目的とする。

2 研究方法

2-1 調査対象

千葉県内の私立高等学校に在籍する普通科3年生40名（男子6名 女子34名）を対象とした。授業は1クラス（学校設定科目：家庭実践）で実施され、最終的に回収された自由記述データは、合計40名分である。

2-2 調査方法

授業は、家庭科の被服領域においてスウェーデン刺繍を用いたポーチ製作を課題とし、合計6時間（各回50分）を表1の流れで進めた。

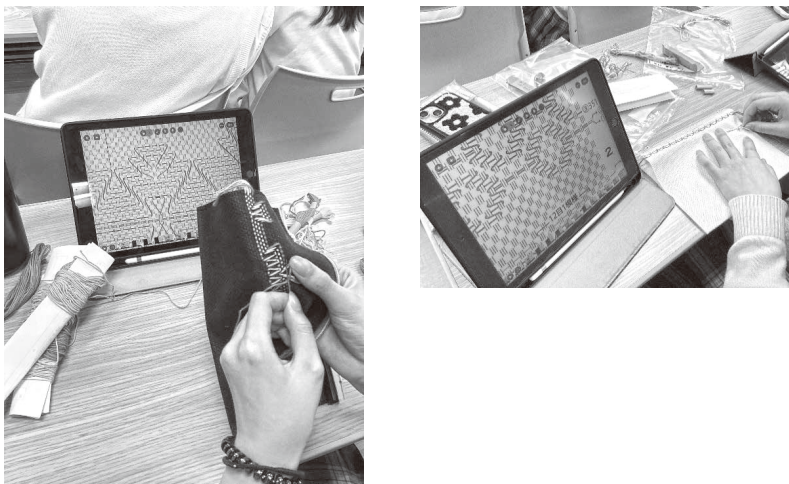
表1 指導計画

1時間目	スウェーデン刺繍の基礎技法を動画で説明し、各自のタブレットに図案資料を提示
2～5時間目	各自が刺繍の模様を選択し、授業内に制作を進める
6時間目	ポーチの形に半返し縫いで仕上げる

作品例を以下に示す。



生徒は一人1台タブレット端末を所有しており、授業でも活用を試みた。



授業終了後に質問紙を配布し、授業の前後を通じて感じたことや気づいたことを自由に書いてもらった。回収した自由記述は文字データ化し、分析対象とした。

2-3 分析方法

文字データより「スウェーデン刺繍」について言及している記述を抽出し、語りの意味・内容ごとにコーディングしてオープンコードとした。得られたオープンコードの共通性や関連性を見出しながら、より抽象度の高い焦点コーディングを行った。本研究では、技能

習得・自己効力感、学習意欲の向上、苦手意識の克服、協働学習の効果の4カテゴリーが生成された。コーディングおよび分析の手法については、佐藤（2008）による質的データ分析の方法を参照した。

表2 コード一覧

コード	オープンコード
肯定評価	楽しい
	集中できた
	慣れてくると楽しい
	好きになれた
学習意欲の向上	もっとふっくらさせたい
	もっとかわいいのを作りたい
	次は思ったようにいい感じに
	次回も頑張りたい
	次回は早く取り掛かりたい
	次からは友達に頼られても自分のをしっかり進められるように、作業スピードを上げれるようにしたい
	早く縫えるようになりたい
	次回はもっと多くの手順をこなしたい
技能の習得・自己効力感	一つの柄を完成できた
	上手くできた
	前回よりも早く縫うことができた
	どんどんやるたびに前できなかったような模様ができるようになって
	実際にやってみると回数を重ねるごとにスムーズにできるようになった
	中学の頃よりも圧倒的に技術も上がって
	やっていくうちに慣れて最初よりもどんどん早くできるようになると感じ
	やることは同じことの繰り返しだったから毎授業で上達できたと思う
	自分ができそうな簡単な模様を選んで自分的にとっても納得いく刺繍をすることができた
苦手意識の克服	はじめはししゅうすると聞いて絶対できないと思っていたしやりたくないと思っていたけどどんどんやるたびに前できなかったような模様ができるようになってとても嬉しかった
	最初デザインを見た時どれも難しそうに見えて私はできないかと思ったけど実際にやってみると回数を重ねるごとにスムーズにできるようになった
	中学の頃から刺繍が苦手な高校でもやるのかとあまり進まない気持ちだったけれど中学の頃よりも圧倒的に技術も上がって

苦手意識の克服	難しそうな見た目をしていたがやり方どうりにやれば簡単でした
	先生に聞いてアドバイスをもらうことで苦手意識もなくなって授業を受けて刺繍の印象が良い方向に変わった
	刺繍と聞くと難しく細かく苦手なイメージがあったのですが、今回のスウェーデン刺繍はやっていくうちに慣れて最初よりもどんどん早くできるようになると感じて楽しかったです。
	今まで刺繍はあまり得意じゃなかったけどスウェーデン刺繍なら簡単に楽しかった
	成長しているのが目に見えて分かったため自分の気持ちは大変から楽しいに変わっていき
	思ったよりも楽しくて刺繍が苦手だけどもう少しやりたいと思った
	最初はあまり上手にできなかったけど回数を重ねると上達して嬉しかったです
	苦手な分野でありあまり乗り気ではなかった刺繍がとても楽しくてもっとスウェーデン刺繍をやりたいと思うようになりました
	昔から刺繍は苦手意識を持っていた最初の時にうまくできるか不安でした。しかし周りのクラスメイトに声をかけて相談してみたり互いに分からないところを教え合うことでだんだん楽しく作業できるようになりました
	細かい作業をするのが苦手だったけど自分ができそうな簡単な模様を選んで自分のことでも納得いく刺繍をすることができた
	刺繍は難しいイメージだったけどやってみると楽しくて
	最初は初めてきて分からなかったけど、布に糸をくぐらせるだけですごく簡単だったし
	最初は図を見た時に凄く大変そうでやる気が出なかったのですが、やっているうちに楽しくなり
	最初はやり方を見てもいまいち分からず進みも遅くなり大変だったけれど友達や先生に教えてもらいながら少しずつできるようになりました
	最初は正直刺繍とか細かい作業が苦手で嫌いだったし、お手本の手順見ても何がどうなるか理解できなくて進まなかったけどだんだんと作業に慣れてばっばとできるようになり楽しくなって
	最初は複雑で難しいものだと思っていたが、はじめてみると思ったよりも簡単に楽しかった
	刺繍には苦手意識があったが少し変化した
	スウェーデン刺繍は裁縫が苦手な私でも簡単に楽しくできました
	最初は難しいのかなと思っていたけどやってみたらすごく簡単に楽しかった
協働学習の効果	一番初めは刺繍を1回もやったことがなかったから難しそうに感じたけど、やることは同じことの繰り返しだったから毎授業で上達できたと思う
	幼少期から刺繍に対して苦手意識があったのですが、今日刺繍した時は少し楽しく作業できました
	友達に教えてもらいながら進めることができ
	3人の友達に交互に呼ばれちゃって
	友達が丁寧に教えてくれたおかげで思ったより進めることが出来ました
	友達に聞いて助けてもらった

2-4 倫理的配慮

本調査は授業の一環として実施し、記述は匿名で収集した。生徒には研究利用の目的を説明し、同意を得たうえで分析対象とした。個人が特定されないよう配慮し、発言は必要に応じて要約または匿名化した。

3 結果と考察

3-1 技能習得・自己効力感

多くの生徒が、授業を重ねることで肯定的評価となり技能の上達を実感していた。

- * はじめは全然進まないし糸を通す所を間違えたりして大変だったけど、慣れてきたらスムーズにできるようになって楽しみながら進められた
- * 難しい刺繍も素早くきれいにできるようになった。やればやるほど技術は向上していくのだと思った

3-2 学習意欲の向上

回を重ねるごとに「もっとやりたい」「次は難しい模様に挑戦したい」といった意欲の向上が多く見られた。

- * どんどんやるたびに前できなかったような模様ができるようになってとても嬉しかった。もっと難しい模様や色々な色の糸でポーチ以外のものを作ってみたい
- * 段階的にレベルを上げていくことで良い技術の向上につながれたと思います。自分でデザインを組み合わせ糸の色を考えるのも楽しかった

3-3 苦手意識の克服

これまでの学習経験から「苦手」「できない」と感じていたが、取り組む中で「できるようになった」「もっとやりたい」という自信につながっている。

- * 中学の頃から刺繍が苦手で高校でもやるのかとあまり気が進まなかったけれど、技術も上がって楽しい気持ちになった
- * 最初は絶対できないと思っていたけど、どんどんやるたびに模様ができるようになってとても嬉しかった

3-4 協働学習の効果

友人や教師との関わりを通じて学びの意欲が向上する記述も見られた。

- * 先生や友達に教えてもらってだんだんできるようになった
- * 周りのクラスメイトに声をかけて相談してみたり互いに分からないところを教え合うことでだんだん楽しく作業できるようになった

3-5 まとめ

以上の結果から、スウェーデン刺繍の技法はすぐに身につくため、難しいと思った模様も満足いく出来栄となり、自らの技能習得を自覚することで、自己肯定感や自己効力感が向上した。また、簡単な技法で色や模様の工夫ができ、デザインを考える楽しさや出来上がりへの満足感が得られ、次の学びや創作意欲に結びついていると言える。一見難しく見えたが、技法は簡単で、回数を重ねるごとに上達していったため、作品が仕上がり、達成感を得ることができ、苦手意識が克服された。先生や友達に教えてもらって上手にできるようになり、友達同士で教え合うことで、楽しく作業ができるようになったことは、協働的な学習が成立しているといえる。このようにスウェーデン刺繍の授業は、生徒の技能習得と自己効力感の向上を中心に、学習意欲の向上、苦手意識の克服、協働的な学びを引き出し、生徒のウェルビーイングや主体的学びを育む場となっているといえる。また、スウェーデン刺繍に取り組むことは、単なる技能習得ではなく、自己変容・協働・生活実践力を統合的に育成する学習として、現代の家庭科教育に求められる、生徒のウェルビーイングや学びの主体性を育む学習活動としての意義を持つことが示唆される。

日本社会に根差したウェルビーイングとして、「獲得的ウェルビーイング（自己肯定感や自己実現など）」と「協調的ウェルビーイング」（人とのつながりや利他性、社会貢献意識など）が考えられ、両者のバランスを取り入れ、日本社会に根差した「調和と協調」に基づくウェルビーイングを教育を通じて向上させていくことが求められている（文部科学省2023）。スウェーデン刺繍の授業実践より、苦手意識をもっていた生徒も、時間をかけずに技能を習得することができ、技能が向上することにより、苦手意識を克服し、作品を仕上げることで自己効力感を得、さらに良い作品を作りたいという学習意欲の向上につながった。このことは、スウェーデン刺繍に取り組むことで「獲得的ウェルビーイング」の成果が期待できることを示している。また、個々の作業について、先生や友人に聞き、教え合うことで技能が向上し、主体的に学習に取り組むことができ「協調的ウェルビーイング」

の向上が期待できることを示している。

以上より、家庭科の授業でスウェーデン刺繍に取り組むことは、生徒のウェルビーイングの向上に寄与することが明らかとなった。

4 総合考察

4-1 スロイド教育の理念と展開

ものづくりを題材とする学習としては、スウェーデンにおけるスロイド教育がよく知られている。スロイドとは、木工・テキスタイル・金工という多種多様な材料を用いて時間をかけて作品を作る教科である。職業教育として1870年代頃から始まり、内容や方法を変えてのちには普通教育の性質をもつ学習となり、1962年からは義務教育の中に必修教科として設定された（長、河村 2018）。

スロイドの学習は、義務教育である小中学校の第1学年から第9学年に設定されている。作品作りは、児童生徒が想像したアイデアを発展させることから始まり、教師が児童生徒の興味を引き出すような手立てを工夫し、児童生徒のアイデアを尊重した上で作りたい作品の製作過程に必要な知識や技能を与えるサポートをするように設定される（同）。

このようにスロイド教育は、創造性や主体性、生活との関連を重んじ、作品の完成度だけでなく学習過程や個人の工夫を大切にしてきたことが明らかにされており、その理念は、現代日本の教育が目指す生徒のウェルビーイングを支える学習と親和性が高い。家庭科教育とも共通するものがあると考えられるが、日本の家庭科はスロイドとは異なり、限られた時間内で家庭生活全般を対象として学ぶ総合的な教科である。時間数の不足が課題とされる中、どのように「ものづくり」を取り上げていくかについては、現代における「ものづくり」の意義を再考した上で、短時間で取り組めて学習効果の高い教材の開発が必須である。

4-2 布を用いた製作実習の課題

我が国の家庭科における布を用いた製作実習では、従来、正確な技能を習得することが重視されてきた（山中他 2023、2025）。技能習得を重視する学習が主体となると、見本通り、正確に仕上げることを中心とした題材選びがなされることが多く、生徒が自由にデザインを考える機会や表現の余地が制限されるという課題が指摘されている。さらに山中他(2022)は、自由なデザインを認めた「刺し子」実践において、生徒が図案を自由に考案することで、授業中「ぬうことを楽しんでいる」「時間が早く過ぎる気がする」などのフロー体験（没入体験）を得ており、製作後の生活実践や意欲に関連があることを示している。実際には、

教師は製作したものを生活で活用することを重視しており、多くの中学校における布を用いた製作では題材として袋ものや小物類が広く取り上げられ、製作に基礎縫いを盛り込んで技能習得を意図していることなどが特徴として明らかにされている。多くの高等学校においても同様に、製作を楽しむことよりも、基礎技能を習得し衣生活に限らず広く生活に活用することが目標とされていると考えられる。

2018年告示の学習指導要領では、家庭基礎の目標として「(略)自分や家庭、地域の生活の充実向上を図ろうとする実践的な態度を養う」ことが挙げられており、生活を豊かにするための布を用いた製作実習に取り組むことは、十分に可能であると読み取れる。スウェーデン刺繍は自由なデザインはもちろん色や模様の工夫によって作品として存在感のある出来ばえとなるので、生徒が製作を楽しみ達成感を得ることのできる実習として取り組むことが検討されるべきである。

5 今後の課題

2018年告示の学習指導要領解説「家庭編」では、「服飾手芸」の一技法として具体的にスウェーデン刺繍が明記され、その位置づけが再評価されている（文部科学省 2018）。これは特別支援学校を中心に、多くの教育現場でこの刺繍が取り上げられていることが反映された結果であると言えるであろう（仲田、若月 2025）。

本報で考察したとおり、スウェーデン刺繍は生徒のウェルビーイングに貢献する題材であることが明らかである。家庭科教育において手芸の学習は、単に技能を習得するにとどまらず、創造性や自己表現、協働的学びを促す教育的意義を有しており、教師は基礎縫いの技能（まつり縫いやボタン付けなど）にとらわれすぎず、生徒がより達成感を得られる実習について検討をするべきである。

本実践では、生徒は全員がタブレット端末を所有し、デザイン選択、刺し方の基礎的技法の確認などにそれぞれの進度に合わせて活用することができた。ICTの活用により作業を効率的に進められるため、手芸の学習におけるICTの効果的な活用について今後も検討をしていくことは必要である。

本報告は、高等学校3年次の選択科目における実践であったため、カリキュラム編成や選択生徒数などにおいて比較的自由度の高い環境での実践であった。今後はすべての生徒が履修する必修科目（家庭基礎、家庭総合）における実施を目指して検討を続ける必要がある。第一に年間を通したカリキュラムにおける位置づけを検討すること、第二に1クラス40人を複数クラス指導することを条件として、指導法を検討することが今後の課題である。

【参考文献】

- 長拓実. (2024). スウェーデンの被服製作学習における教師の役割：個別的な支援に着目して. 愛知学泉大学紀要、6 (2)、53-67.
- 長拓実、河村美穂. (2018). スウェーデンのスロイド教育の特徴：学習目標と評価の設定を中心に. 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集、61 (0)、57.
- 速水多佳子、黒光貴峰. (2014). 大学生の家庭科における調理、被服製作の知識・技能の習得状況にみる課題. 日本家庭科教育学会誌、57 (1)、14-21.
- 国立教育政策研究所. (2017). PISA2015 年調査国際結果報告書生徒の well-being (生徒の「健やかさ・幸福度」). pisa2015_20170419_report.pdf (2025 年 11 月 1 日閲覧)
- 文部科学省. (2018). ウェルビーイングの向上について (次期教育振興基本計画における方向性) <https://www.mext.go.jp/kaigisiryō/content/000214299.pdf> (2025 年 11 月 1 日閲覧)
- 文部科学省. (2023). 教育振興基本計画. https://www.mext.go.jp/content/20230615-mxt_oseisk02-100000597_01.pdf (2025 年 11 月 1 日閲覧)
- 仲田郁子、若月温美. (2025). 高等学校家庭科における手芸の学習 (第 1 報)：我が国におけるスウェーデン刺繍の歴史と手芸の学習. 國學院大學栃木短期大學紀要、59、45-59.
- 中西佐知子、堀内かおる. (2020). ナレッジ・マネジメントの視座からみた家庭科教員コミュニティの可能性. 横浜国立大学教育学部教育デザイン研究、11、97-105.
- 佐藤郁哉. (2008). 質的データ分析法. 東京：新曜社.
- 瀬川朗、長拓実. (2023). 小学校家庭科の布を用いた製作題材における技術の検討：検定教科書の通時的分析から. 鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編、74、111-132.
- 田村和子、玉川草路. (2004). 中学校の被服領域に対する高校 2 年生の意識. 日本家政学会誌、55 (6)、507-513.
- 鈴木明子. (2013). 家庭科における製作学習に対する意識と自己効力感との関係：中学生の製作学習による変容. 広島大学大学院教育学研究科紀要第 2 部、62、321-329.
- 富田道子. (2023). 被服製作学習に対する意識と有用感の検討 (第一報)：大学生への調査から. 広島都市大学子ども教育学部紀要、9 (1)、21-30.
- 山中大子、寶達佑美、川端博子. (2022). 製作学習後の生活実践に及ぼす学習時フロー体験の効果：「刺し子」学習の追跡調査. 日本家庭科教育学会誌、65 (2).
- 山中大子、河村美穂、川端博子. (2023). 教育的意義に関する家庭科の製作実習研究の到達点. 埼玉大学紀要教育学部、72 (2).
- 山中大子、川端博子. (2025). 中学校家庭科の布を用いた製作の現状と課題：2021 年度全国公立中学校家庭科担当教師質問紙調査. 日本家庭科教育学会誌、67 (4).